



今昔
百鬼拾遺
雲



百鬼拾遺序

非文然
序

懷其文庫

畫師石煥隱老也性質溫雅庭成一
一簣之功池引九仞之泉而春紅
開靦眊夏涼張沂樂煉水流荻花
冬雪群關四時耽此樂事而不
知老之將至也惟至同好者欣然
烹茶勉然談畫既下筆直足成百

餘圖奕奕。至勝。所以賞矣。由此。子益衆。成編。且多。皆世之所笑也。丙申。春著百鬼夜行。已亥。歲後。編繼出。而前後百鬼全焉。今茲辛丑。春書肆。又來請。幽冥之圖。而欲以刻之。隱老笑曰。多圖之。則不啻擴心力。而取譏千載。但恐鬼哭。夫

如之。何書肆曰。画工。元是盡無類之心。合有道之器。若夫。兩粟鬼哭。亦費力。所至。而尚佳事也。強請。莫辭於。是無已。而探怪聚妖。而為三卷。題百鬼拾遺。問序於余。以不才。辭隱老。曰。負俗之圖。為嬰兒之戲而已。不才。而且作序。則是一怪。

事也。因妄固陋而書其端矣。

安永十辛丑春

元洲

滕武幹

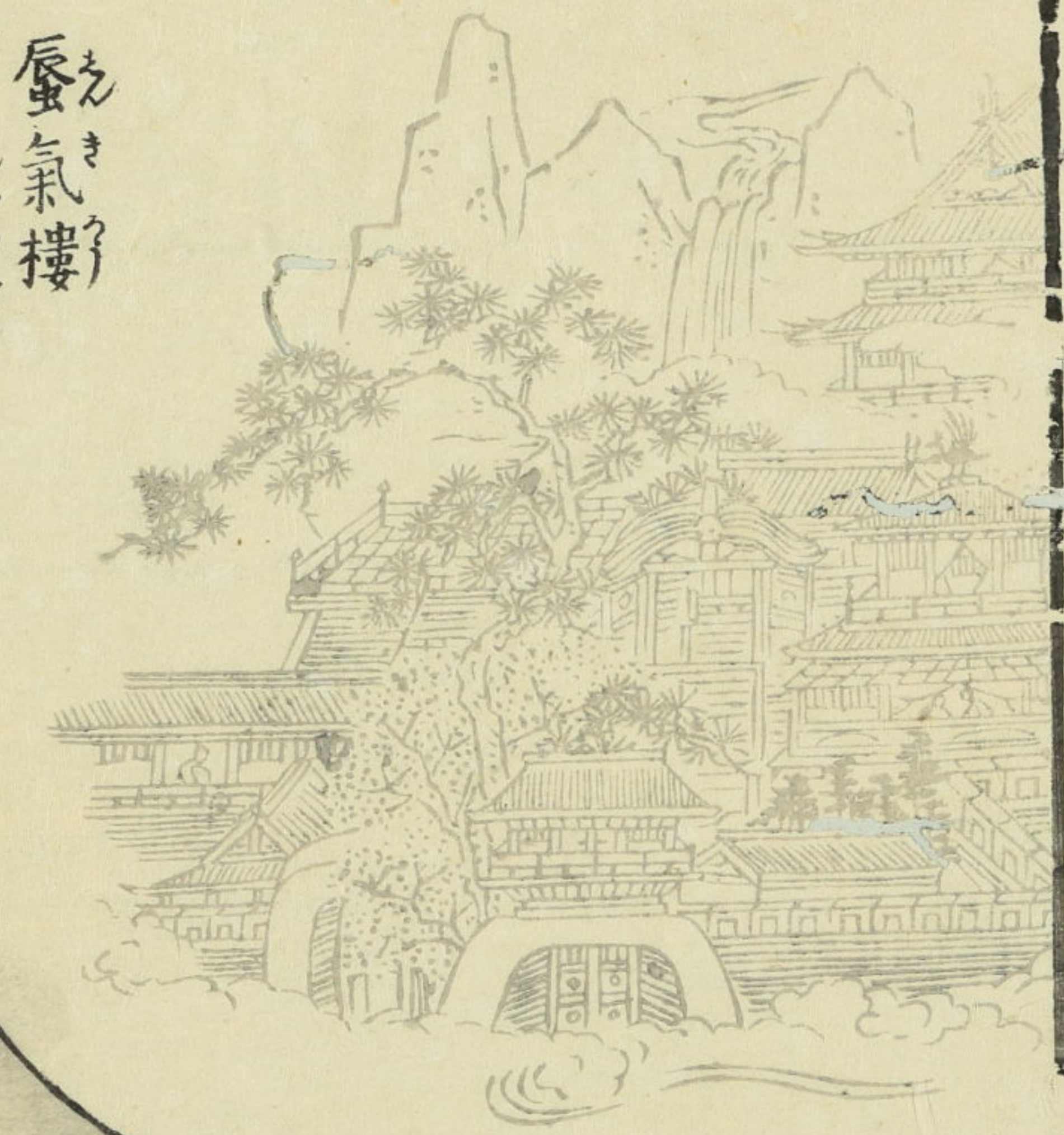


百鬼夜行拾遺上之卷目錄

○ 蜃しん氣き樓ろう
 ○ 人にん面めん樹じゆ
 ○ 返へん麁ぞ香かう
 ○ 天てん初しよ礫れき
 ○ 燈とう臺たい鬼き
 ○ 出しゅりり婆ば
 ○ 蛇へび骨ほね婆ば
 ○ 多た少しよ女によ

○ 燭しやく人にん影えい
 ○ 彭ほう道どう成せいのの鐘かね候こう奥おく陰いん
 ○ 泥どろ田でん坊ぼう
 ○ 白しろ粉こな婆ば
 ○ 陰いん女によ婆ば
 ○ 煙えん羅ら

史記の天官書てんくわんしよに曰く
 海旁かいぼう蜃氣しんき樓ろう臺たい象しやうと
 蜃しんは蛤かきなり海上かいじやうに氣きとあましく
 海かい市しと名なづく又また海かい市しと云いふ





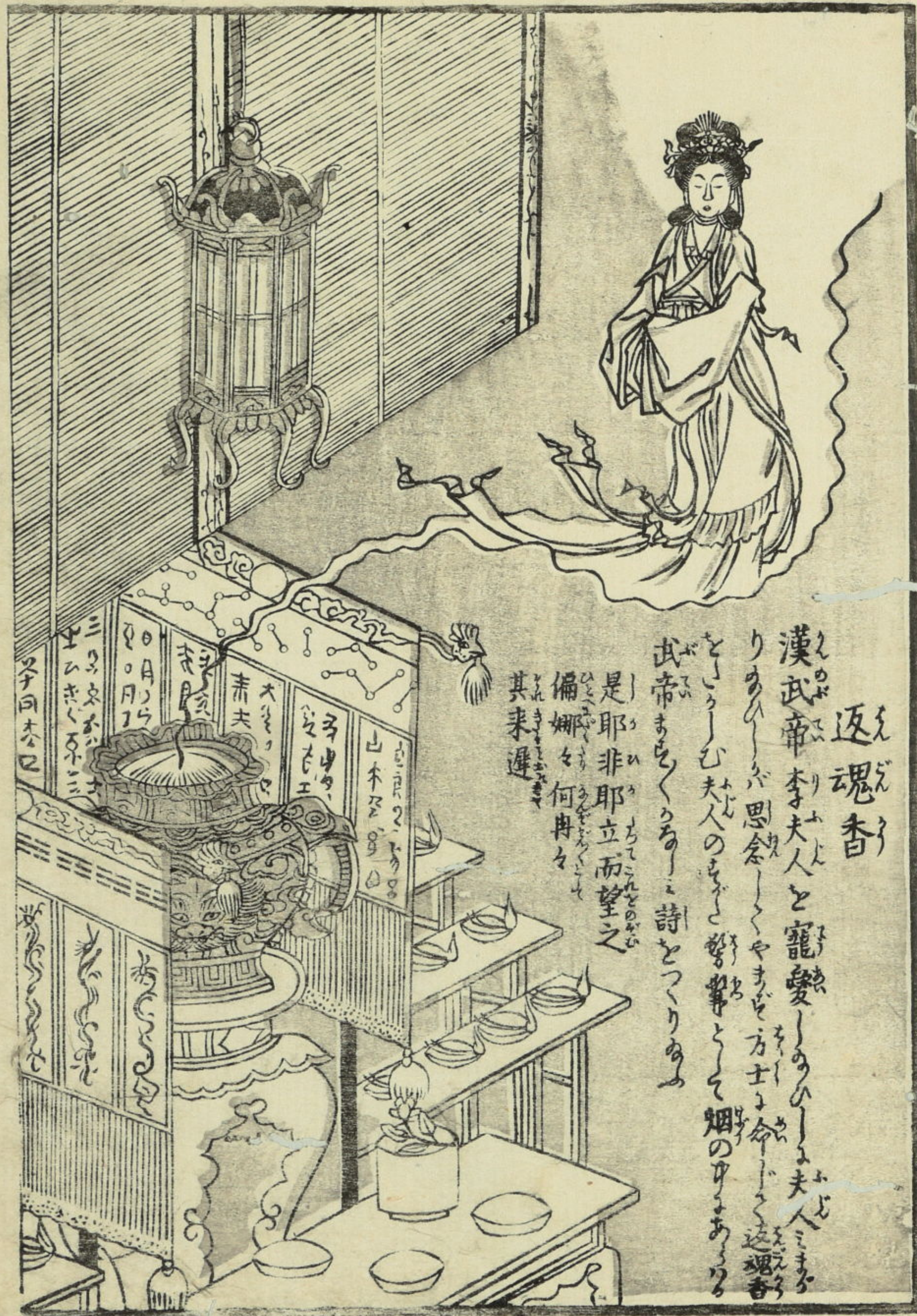
人面樹

山谷ありその花人の首のこゝろ
 ののこころこゝろ笑つるあま
 りあまこゝろこゝろあま
 花をこゝろ



燭陰

山海經曰
 鍾山の神と
 燭陰とよ
 赤のこゝろ千里
 そののこゝろ人面
 樹ありて
 赤色あり
 鍾山
 北海の
 壑あり



返魂香

漢武帝李夫人と寵愛し、夫人の死後、思念し、方士を命じて返魂香を作らせた。夫人の姿を写し、煙の中にあつた武帝も、夫人の姿をうかがひ、詩をつくり、
 是非耶耶立而望之
 翩翩何冉々
 其来遲

大正
 赤夫
 山本
 三日月
 上ノ三



人魚

建木の西
 あり人面うて
 魚身足あり胸
 より上ハ人うて
 下キ魚ニ似たり是
 氏人國の人なり
 と云



天狗磔
 元深山函谷の中あり
 一陣の魔風あり
 山鳴谷と云ふ
 大石とをばけり
 ありと云ふ
 天狗磔と云
 左傳よるる
 宋よつる七の
 石しうあぐ
 石しうあぐ
 石しうあぐ



彭侯
 千歳の本ハ精あり狀異狗
 のゴト一屋あり
 又山彦と云列あり
 面人よけり



古庫裏婆

傍の妻と梵嫂とらうり
 輟耕録よるうりある山寺
 七代以の伝持の愛せり
 梵嫂との妻の

庫裏よす
 槽越の米錢と
 つらら新死の
 屍の皮と
 餌食と
 三途河の奪衣婆
 よるうり



泥田坊

むら小圃よ
 おおあり子孫のうらやま
 いさゝの田地とみまきく夏
 風雨とさけと時々の耕作かてうり
 一よこのおみりうりその子酒まうり
 農業と事とせむとてまの田地と他人まうりあふれ
 おろく目の一つあるうりまのいでうへせくとのおろくこれと
 泥田坊といふと



白粉婆
 白粉婆の神と
 脂粉仙娘と云れりいふは
 此の侍女なるべしあちらのまの
 ろいらの加振女のけしひとむりまのら

蛇骨婆



ところへ 巫咸國ハ女丑
 の北ニあり右のよ青蛇
 とり丸のよ赤蛇と
 人まのりて蛇骨婆ハ
 けかの人、或は云
 蛇塚の蛇五右衛門
 ころのくま
 ようく蛇骨婆と
 骨婆と
 未詳



情兮女

楚のお宋玉が東鄰の美女
あり 塙よのかりて宋玉とうらふ
嬋然としてび笑を湯城の
人と惑せしとぞおよそ美色の
人情をこころをさす
お今よ、い、い、
舞いけらく
結帯といひ
うつくしくおの
人とまをさそ
遠年の美
あんな



影女

あけのある家
六月が女
が影をさす
うらやまを 莊子よ
岡西と景と同答せしあり
景ハ人のげし 岡西ハ景のまをさす 微陰あり

煙々羅

あつた家のつらき煙の煙
さぞくさくあやういこと
さうりまよ羅の風



あれを
煙々羅
名づけ
いん

あつた

さぞく

あつた

